

巡検Ⅰ：テーマ「石狩川流域の開発史」

大会1日目の9月27日に実施した。参加者は35名。巡検コースは次のとおりである。札幌駅北口発（8：30）→環状線・国道275号線・運河沿い農道経由→篠津運河→鶴沼ワイナリー→アルペングルフクラブ（昼食）→砂川神社裏（北海幹線用水路）→北海頭首工→住友赤平炭鉱旧立坑→道央自動車道→北海道教育大学旭川校着（17：00）。

石狩川周辺地域は札幌市・旭川市などの大都市を抱える北海道の人口集中地域である。この地域の明治期以降の開発の歴史と現況を、地理学的視点から観察し読み解くことが、今回の巡検の趣旨である。

集合場所である札幌駅には、2003年3月にJRタワーが完成し、新たな商業中心として機能している。また、札幌駅北口周辺は近年ITベンチャー企業の集積が著しく、これら企業群と北海道経済産業局、北海道大学などが一体となり、IT産業クラスターの形成に向け、活発な活動を行っている（説明：橋本）。

札幌駅から郊外へと向かう車中、近年の札幌における大型ショッピングセンターやコンビニエンスストアの立地展開について説明があった。札幌市においてコンビニエンスストアの郊外への展開の主たる担い手は地元資本のセイコーマートである。これに対して後発の本州資本は都心部への集中を進めている。またイオングループは新興住宅地への進出に積極的で、札幌市周辺部の商圏は著しい変化をみせている（説明：岩野・経亀）。

札幌市東部郊外の農地の景観を特徴づけているのはタマネギ畑である。札幌市は1980年代後半まで道内の主要なタマネギ産地であったが、都市化の進展により農地の宅地への転換が進み、道内のタマネギ生産における札幌市のシェアは減少傾向にある（説明：梅田）。

石狩川流域では、台風や低気圧の通過などによって、かつて頻繁に大規模な水害が起こっている。特に1981年8月4～8日に起こった水害の被害は著しく、被害総額は950億円にのぼった。このような水害を防ぐため、石狩川の直線化、堤外地の拡幅と堤防の強化、遊水地の設置などの対策が講じられてきたが、河川の直線化には負の効果があることも指摘されている（説明：山下・氷見山）。

石狩川の右岸には篠津運河と呼ばれる用排水路がある。この地域は低湿で農地化が遅れていたが、

1951～1970年の「石狩川水系総合開発事業」の一環として、水田開発事業が行われた。用水系統・道路網・保安林などの整備が行われ、計画面積11,332haのうち、8,578haの水田が開田した。しかし、地盤の不等沈下が頻繁に起こるなどの問題も起こっている（説明：山下）。

石狩川の右岸を国道275号線沿いに北上し、中・南空知地方の農業を観察した。国道の東側には広大な稲作地帯が広がっている。また月形町では、1970年代の生産調整を契機に、キク・カーネーションなどの栽培がはじまり、花卉栽培地域としても知られている（説明：梅田）。

浦臼町では日本最大の広さを誇るブドウ園をもつ（有）鶴沼ワイナリーを見学した。ここのブドウは小樽の北海道ワイン（株）用に栽培されている。社長の今村さんにブドウ園を案内していただき、ミューラ・トルガウなどワイン用ブドウの試食や、ワインの試飲をさせていただいた。

その後、石狩川左岸に渡り、空知中核工業団地を視察した。この団地は293haの面積をもつわが国最大級の内陸型工業団地で、北海道が指定する7つの産業拠点地域の1つである。しかし実際は、用地の3分の1以上をアルペングルフクラブが占め、他は空地が目立つ。企業の招致が進まない新設工業団地にレクリエーション施設が進出するケースは全国的に多いが、その一例である。昼食はこのゴルフクラブのレストランで、美しくも閑散としたグリーンを眺めながらとった（説明：氷見山・山下）。

昼食後訪れた北海土地改良区は、従来の北海・中村・三笠・岩見沢・南岩見沢・栗沢・東栗沢の7土地改良区が平成15年4月に合併してできたもので、赤平市・砂川市・奈井江町・美唄市・三笠市・岩見沢市・栗沢町・栗山町・南幌町・北村・月形町・江別市の12市町村に及ぶ広大な地域を管轄している。砂川市にある砂川神社裏でこの土地改良区が管理する北海幹線用水路を見学した。幅約10メートル、深さ2メートルほどもある大きな水路が深い谷をまたいで伸びる様子は圧巻である。この用水路を、その取水口である空知川左岸の北海頭首工まで遡り、事務所では北海土地改良区総務課長の泉さん、砂川事業所長の川尻さんのレクチャーを受けた。シーズンオフで水のない灌漑溝に降り立ってみて、その規模の大きさを実感することがで

きた（説明：氷見山・小野寺）。

次に空知川の上流に向かい、住友赤平炭鉱で旧立て坑を見学した。北海道空知地方はかつて産炭地として栄えたが、エネルギー革命により石炭産業は衰退した。赤平市では、最後の炭鉱である住友赤平鉱が1994年に閉山した。赤平市はこうした鉱山遺産の保存と活用を通じた地域の活性化を模索しており、本巡検と時期を同じくして「第6回国際鉱山歴史研究会赤平大会」が行われていた（説明：山下・小野寺）。

夕方、滝川 IC から道央自動車道を旭川に向かった。この間、石狩川流域の地形(大内)、人口分布と産業構

造の変化(川村・小野)、社会資本の蓄積(橋本)について説明があった。

晴天にも恵まれ、たいへん実りの多い巡検であった。

案内者：氷見山幸夫(北海道教育大学旭川校)、山下克彦・大内定(北海道教育大学札幌校)、小野寺徹(北海道滝川高等学校)、橋本雄一・梅田克樹(北海道大学)、川村真也・岩野直(北海道大学・院生)、経亀諭・小野彩子(北海道大学・学部生)。

(氷見山・橋本記)

巡検II：テーマ「大雪山旭岳の自然と観光」

大会2日目の9月28日夕方から29日にかけて実施。参加者は25名。巡検コースは以下のとおりである。

9月29日：北海道教育大学旭川校発(17:00)→旭川市街地経由→東川→北海道教育大学大雪山自然教育研究施設着(18:30)。その後夕食、レクチャー、温泉入浴、泊。

9月29日：天候不良のため旭岳登頂は断念。朝食後施設発→旭岳ロープウェイ→姿見の池周辺散歩→裾合平方面に向かうも悪天候で下山。施設発(12:00)→忠別ダム建設現場→旭山動物園→旭川兵村記念館→旭川駅前到着後解散(16:00)。

旭川市周辺地域には国内最大の大雪山国立公園が広がり、主峰旭岳や忠別岳方面から流れ出る忠別川では、北海道開発局によって忠別ダムが建設されている。また、公園内では高山帯という特異な環境下の自然環境を体験できる。この豊かな環境の中で自然公園の保護・管理(自然解説活動や人為的改変への対策)や林野制度(国有林・道有林)、観光開発(ロープウェイ架け替えやホテル建設)等を地理学的観点を重視しつつ検討し、かつ自然に自らをおくことによる実体験を得ることが、今回の巡検の趣旨である。

まず貸切バスで北海道教育大学旭川校を後にし、石狩川にかかる旭川のシンボル旭橋を渡り、都心部を通り市街地の南東郊の農村部に出た。上川盆地の水田区画の標高が上昇していく様、戦前の東川地区用水路建設時の中国人慰霊碑の存在、忠別ダム工事現場(翌日改めて見学)、国立公園入口の環境省による看板、旭岳温泉の集団施設地区などに注目しながら、旭岳温泉の宿泊施設に到着した。

この施設は北海道教育大学大雪山自然教育研究施設で、国立公園第2種特別地域内にあり、周辺の景観

に配慮した瀟洒な2階建てログハウスである。この施設の自慢は露天風呂である。この施設は学外者の利用も可能で、幅広い利用を歓迎している。

夕食後のミーティングでは、まず、氷見山(旭川校)が施設の紹介を、現地で合流の橋教授(旭川校生物学)が大雪山の植物、とりわけ植生帯の垂直分布を中心に説明し、天女が原での学生実習の様子も紹介された。次に、高橋教授(北海学園大)は欠席のため資料配布のみとなり、代わりに鈴木助教(道都大)が大雪山の地形の説明をした。最後に武田(岩見沢校)が国立公園・林野政策や観光開発、自然保護施策について説明した。旭岳温泉集団施設地区から旭岳山頂にかけて土地所有が国有林と道有林とに分かれていること、国立公園60周年を迎えた後、環境省による看板類の整備が進んだこと、人為的影響として山のトイレ問題の顕在化や入込みの管理問題、等の説明があった。夜は露天風呂につかりながら、しばしの自然の中での癒しを味わった。

翌日、早朝は雲間から旭岳が望めたものの、天気予報は気圧の谷通過で優れないとのことで、とりあえず朝のうちにロープウェイで中腹まで登り、姿見の池へと向かった。このロープウェイは、経営が本州製紙系からアルファトマムを経て、現在のワカサリゾート(わかさいも本舗)へと移った。3年前の架け替え工事で改築された際中間駅が廃止され、出来るだけ新規の建物の建設を抑制すべく、案内・情報提供機能の拡充のため、旧駅舎をそうしたスペースとして活用している。姿見駅からは徒歩で姿見の池を目指す。池までの園地内歩道では、自然観察ガイド付きツアーの姿が目についた。また、周水河地形の説明板等、近年急に予算が付いた環境省の看板(実は「庁」のまま)が目

立った。池のほとりの噴気孔の近くには旭岳登山道入口に昨年秋に改修された避難小屋(旭岳石室)が立ち、その横には排泄物持ち帰り用トイレも設置されていた。既に強風と雨模様で、とりあえず旭岳頂上は断念するも裾合平方面へ進むことにする。しかし途中で雨が強くなり、あえなく退散を決める。この時期旭岳界限はもはや冬の趣きなのである。

早々とロープウェイで下山し、宿舎で荷物整理の後、バスで旭川へと向かう。前日暗くてよく見ることが出来なかった忠別ダムのPRコーナーに立ち寄り、説明員からこの巨大ダム建設の現状を聞く。このコーナーは建設会社JVで設置しているとのことで、公共事業の理解促進のために金をかける時代になったことを実感した。

その後国内最北の旭川市旭山動物園へと向かう。入園者と動物との距離を縮めるという斬新なアイデアで動物園を改革し、入場者の大幅増加を実現したことで知られる動物園である。とりわけ、下から大きな水槽を見ることが出来るペンギン館やホッキョクグマ館、北の森の王者「シマフクロウ」舎、猿山、山羊等に直接触れ合える子供動物園は、久しぶりにおとな

の目で見た動物園として興味深いものであった。また、園内の資料館では、道内で最近問題となっているブラックバス密放流等の外来種問題と、生態系の破壊についての展示も見つけることができた。

解散時刻までに余裕があったため、東旭川にある屯田兵村記念館を見学した。屯田兵制度は北海道の開拓の過程で特徴的だった、北方防備と農地開発を組み合わせ入植を先導させる目的の制度で、日露戦争への出陣や当時の教科書の展示もあり、軍都旭川の成立の背景を感じさせるものであった。見学終了後、ほぼ当初予定していた時刻に旭川駅に到着し、解散した。

結局、山の上では悪天候となり予定していたトレッキングが縮小を余儀なくされたが、アットホームな雰囲気の中、一味違った雰囲気の巡検を堪能できたものと確信している。

案内者：氷見山幸夫・橘ヒサ子(北海道教育大学旭川校)、武田泉(北海道教育大学岩見沢校)、鈴木正章(道都大学)、高橋伸幸(北海学園大学、やむなく欠席のため資料参加)。

(氷見山・武田記)